

小津映画の「無人のショット」をめぐる諸言説

—その歴史的変遷に即して

具 慧原 (東京大学)

本発表は、小津安二郎(1903-1963)の映画に現れる「無人のショット」をめぐる批評的言説が、時代的な文脈に即してどのように変化したかを明らかにするものである。検討対象とする言説は、小津の同時代から1980年代までに発表されたものである。無人のショットとは、小津映画にしばしば登場する、人物のいない風景・室内空間、静物などを映すショットである。小津は彼独自の手法を用いて、この種のショットを映画内に体系的に並置している。それゆえ小津の無人のショットは国内外の論者の目を引き、さまざまに解釈されてきた。

しかし、無人のショットをめぐる言説を歴史的観点から読み解く先行研究はほとんどない。そのため、小津が活動していた当時の無人のショットに対する評価は捨象されている。確かに同時代の批評は無人のショットに対して積極的な解釈を施さなかったとはいえ、それらを検討せずして後続する時代の議論が持つ意義を理解することはできない。また、各論者の立場を支えている時代状況や相互の影響関係もほとんど考察されていない。それゆえ日米両国における映画批評・理論の傾向形成において、小津がいかなる役割を果たしたのかが解明されていない。

以上の問題意識に基づき、本発表では小津と同時代から1980年代までの無人のショットの批評的言説を歴史的に辿っていく。まず、小津と同時代の批評的言説を検討し、当時はフェイドのような手法が映画文法として重んじられていたため、この文法から逸脱する小津の無人のショットは否定的に捉えられていたという事実を明らかにする。この事実、次に検討する1970年代アメリカでの無人のショットに対する文化論的解釈が、小津批評史にとって大きな転換であったことを示す。文化論的アプローチを検討する際に取り上げるのは、作家主義的傾向を持つドナルド・リッチー(Donald Richie)と、政治的モダニズムの立場に立っているノエル・バーチ(Noel Burch)である。この作業を通じて彼らとその根本的な立場を異にするにも拘わらず、無人のショットを古来の日本文化と安易に結びつけているという意味で一種のジャポニズムに陥っていることを指摘する。最後に1980年代の小津批評として蓮實重彦とデヴィッド・ボードウェル(David Bordwell)を取り上げ、彼らの文化論的解釈批判と、無人のショットの新たな解釈・分析を検討する。彼らは、それぞれ主題論的アプローチとフォルマリズム的アプローチを取ることによって、小津のイメージを日本的・伝統的監督から、モダンで革新的な監督へと変革する。ところが、彼らの主張にも限界があり、そのため文化論的アプローチが完全に論駁されたわけではないことを本発表では明らかにする。

歴史的観点をとる本発表によって、①1970年代の議論に対して新たな意義が与えられ、②各論者によって小津は単なる批評対象ではなく、彼らの批評・理論の実践を可能にするために欠くことのできない存在であったことが明らかにされる。